

中国のほんの話(16)

中国の本屋さん(北京・その二)

蔭山 達弥

北京で最も大きな本屋さんというと、大抵の人は「北京図書大厦」を挙げるだろう。「北京図書大厦」へ行くには王府井から地下鉄で西に向かい、天安門西の次の駅、西単(シータン)で下車し、地上に出る。そこは一面の緑地になっていて、市民の憩いの場所だ。その東隣にあるのが「北京図書大厦」である。入口は前述の「新華書店」と同様、警備員がおり、警報器が設置されていて、不審な客に目を光らせていた。一階は新刊書、実用書、社会科学関係の本が置かれていたが、円形の柱をぐるりと囲むように新刊書を並べる等、ディスプレイに工夫が凝らされている。二階は文学、美術、音楽、書道等の分野の本が置かれ、外国小説の翻訳や通俗小説、エッセイに人気が集っていた。三階にはCD、VCD、DVD、コンピューターソフト、ゲームソフト等が集結している売場があって、若者を中心に賑わっていた。しかし、日本円で一枚千円以上するCDよりも、一本百五十円くらいのミュージックテープがまだまだ根強い人気を保っているようだ。

日本で出版されている北京の旅行ガイドブックを開くと、西単がお洒落なストリートだと紹介されているが、私の印象では東単(トンタン)の方がお洒落な女性が大勢いるように思う。最近の流行語に「性感」(セクシー、色っぽいの意)という言葉があるが、私が滞在した八月は、ジーンズに肌の露出度が高いキャミソール・ブラウスやタンク・トップといういでたちの、まさに「性感」な女性たちがさっそうと街中を闊歩していた。東単から北へ東四(トンスー)までの通りには、そんな彼女たちお目当てのブティックや美容院が並んでいる。東四の交差点をさらに北に渡ると、向かって西側に「隆福寺街」と書かれた額を掲げた鳥居の形をしたやぐら門(牌楼)が立っている。この「隆福寺街」は若い女性を対象にした服、靴、アクセサリー等の店が集っていて、東京ならさしずめ原宿といったところだろう。私が訪れたのは

平日の午後だったが、大勢の女性でごった返っていて、こちらは気恥かしさを覚えた。その「隆福寺街」を西に進むと、人波が少なくなり、閑静な美術館東街に出る。その道を北に少し行くと西側に見えるのが「三聯韜奮図書中心」(写真)だ。



三聯韜奮図書中心

三聯書店は上海にあった生活書店、読書出版社、新知書店の三つの出版社が連合・合併した進歩的で啓蒙的な総合出版社である。韜奮は三つの出版社で最も古い生活書店を設立した著名なジャーナリスト、鄒韜奮(すうとうふん、1895~1944)の名前である。この店は中国へ出発する前、日本在住の中国人の友人から教えてもらったのだが、地上二階地下一階の店構えは「新華書店」や「北京図書大厦」ほど大きくはないが、当地のインテリ層に愛されているだけあって、重厚な感じがする。店内に入ると、二階や地階に行く階段の両側に腰を下ろして本を読み耽ける人が何人もいたが、店員は彼らを咎めることはなかった。地階に下りると、自社出版物の展示コーナーがあって、手前から文学、外国語、哲学、歴史の売場になっている。平積みコーナーには新刊、話題の本以外に、係が独自の選択眼で選んだと思われる、他の店では見当たらない良書が置かれていて、新たな発見の喜びを与えてくれる。見開き二頁の左に詩、右にカラー刷りの絵画・写真をレイアウトした美しい画文集『丹青情縁』(謝岳雄著、花城出版社)もそんな一冊である。店内には心地よいBGMが流れ、至福の時を過ごした。瀟洒な雑誌が並んでいる一階窓際の雑誌コーナーや入口の新刊コーナーもお薦めである。北京に行って、時間的に余裕があれば、是非一度は立ち寄りたい店だ。

かげやま たつや(助教授・中国文学)